

聖書：ヨハネの黙示録 21：9～14

説教題：神の栄光に輝く都

日時：2021年10月24日（朝拝）

黙示録の21章に入って、まず1～8節で新しい天と新しい地における祝福が全体的に語られました。その全体的に語られたことが、今日から見る9節以降でより詳しく描かれて行きます。まず9節で一人の御使いがやって来てヨハネに語りかけます。この御使いについて「最後の七つの災害で満ちた、あの七つの鉢を持っていた七人の御使いの一人が」と言われています。「最後の七つの災害」と関わる「七つの鉢」は15～16章に出て来ました。なぜあの恐ろしいさばきをもたらした御使いがまた出て来たのでしょうか。何か恐ろしい災いが生じるのかとヨハネは一瞬緊張したかもしれませんが。しかし御使いはヨハネに言いました。「ここに来なさい。あなたに子羊の妻である花嫁を見せましょう。」 どうもそのメッセージは恐ろしいことではなく、素晴らしいことのようにです。それにしてもなぜ7つの鉢のさばきをもたらした御使いがここに出て来たのでしょうか。それはあの時のさばきと今日の箇所には関連があるからでしょう。彼が前に出て来た17章1節にこうありました。「また、七つの鉢を持つ七人の御使いの一人が来て、私に語りかけた。『ここに来なさい。大水の上に座している大淫婦に対するさばきを見せましょう。』」 見比べると今日の箇所の言葉とそっくりです。17章でこの御使いはヨハネのところに来て「ここに来なさい」と言い、そこでは「大淫婦に対するさばきを見せましょう」と言いました。その御使いが今日の箇所でも「ここに来なさい」とヨハネに語り、今度は「花嫁を見せましょう」と言っています。同じ御使いが先にはさばきをヨハネに見せ、今度は祝福を見せるためにやって来た。このことはさばきと救いは表裏一体の関係にあることを示唆します。17章で見た大淫婦・大バビロンとは、神に逆らって立つこの世の都市や文化また様々なシステムを指しました。そのさばきがなければ神を信じる者たちの救いはありません。ですから大バビロンのさばきが描かれた直後、18章20節でこう言われました。「天よ、この都のことで喜べ。聖徒たちも使徒たちも預言者たちも喜べ。神があなたがたのために、この都をさばかれたのだから。」 そして今、あの御使いが現れて、今度は祝福の内に輝く花嫁を見せるのです。ここにあるのは対照的な二人の女です。片や神から離れて自らを持ち上げ、この世の豊かさを誇る大淫婦。片や神が定めた子羊キリストにより頼み、その方の妻として現れる花嫁。この花嫁は2節で「夫のために飾られた花嫁のように整えられて」と言われていた教会のことです。ここに改めて神の民はただ最後のさば

きから救われるだけではないことを心に留めさせられます。神の民は何と救い主キリストの花嫁とされるのです。

その教会がここで「子羊の妻」と言われています。「子羊」という表現は、この方が私たちのために払ってくださった犠牲を暗示します。この方は妻のためにご自分のいのちさえも投げ出してくださいました。そこまで愛してくださる夫です。この子羊の犠牲を通して、その花嫁は罪を赦され、聖められ、ついに最後の完成した状態へと導かれます。エペソ人への手紙 5 章 25～27 節：「夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自分を献げられたように、あなたがたも妻を愛しなさい。キリストがそうされたのは、みことばにより、水の洗いをもって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、ご自分で、しみや、しわや、そのようなものが何一つない、聖なるもの、傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです。」 このキリストによってついに美しく飾られた花嫁の姿を見せましょう！と、この御使いは言ったわけです。その祝福の状態を見せましょう！と。

そして御使いは 10 節でヨハネを大きな高い山に連れて行きます。そこで見せたのが聖なる都エルサレムが神のみもとから、天から降って来る様子でした。ある人は「花嫁を見せましょう」と言われたのに、なぜ都が降りて来る光景が記されるのか。花嫁はどこなのか。都の中にいるのかと思うかもしれません。しかしそういうことではありません。2 節でも見ましたように、花嫁も、都も、どちらも教会のことです。昔、エルサレムは神がご自身の名を置くと言われた神の宮がある都であり、それは神の民の共同体・教会を象徴するものでした。そのイメージを用いながら、今や教会が最終状態に至り、完成した聖なる都として天から降って来た様子をヨハネは見たのです。ですからこれから見る都の幻は、単に将来私たちが住む場所を描いたものと見るのは誤りです。これは教会自身のことです。子羊の花嫁なる教会が聖なる神の都としても表現されているのです。この都の姿の内に花嫁である教会の姿が示されています。

さて今日残りの時間で見ると 11～14 節は、この都の外観を描いたものです。ヨハネが遠くから見た姿です。そして次回 15～21 節ではもう少し近くに寄って、今度はこの都の測量のこと、その都の材料のことが記されます。そしてその後の 22 節以降ではさらに近くに寄って今度は都の中の生活の様子が記されます。このように遠くからだんだん近くに寄って行くという視点で以後、描かれます。今日はヨハネが見たファ

ーストインプレッション、その外観までとなります。

まず彼がこの都について見たこと、それはこの都には神の栄光があったということでした。単に都の中のある部分が輝いていたというのではありません。旧約では神の栄光は特に神殿に現れました。神殿奉献の際に主の栄光が現されました。また他にも色々な時に色々な場所で神の栄光の現れがありました。しかしヨハネがここで見たのは、新しい都エルサレムの全体が神の栄光で輝いていたということです。次回、この都の測量のことが述べられますが、この都は相当な大きさを持っています。その都全体が輝いていたのです。ヨハネはその光景について「その輝きは最高の宝石に似ていて、透き通った碧玉のようであった」と記します。碧玉について調べてみますと辞書等に「微細な石英の結晶が集まってできた鉱物で、宝石の一種」とあります。「酸化鉄や水酸化鉄などの不純物が混入しているため不透明で、不純物の違いにより、赤、緑、黄、茶色など様々な色、模様がある」ようです。どうも黙示録に書いてあるように、透き通ってはいないようです。それでこれはダイヤモンドのことではないかと言う人もいます。しかしここはおそらくこの世に存在する宝石に当てはめて考えるべきではないでしょう。碧玉は透き通っていないのです。それは当時の人々も知っていました。しかしヨハネは「透き通った碧玉のよう」と言いました。つまり私たちの想像や経験を超えるものとして語っているのではないのでしょうか。私たちが心に留めるべきは、その前に記されている「最高の宝石に似ていて」という表現です。その都は最高の宝石のような輝きを放っていました。先に述べた通り、これは教会自身を描いたものです。神がともに住み、教会に臨在されることによって、やがて現れる教会は最高の宝石が神の光を照り返して輝くような状態になっているのです。

次に彼が見たのは、その都には大きな高い城壁があったことです。城壁は敵の侵入から町を守るためのもので、安全を象徴します。ある意味で新しい天と新しい地では、このような城壁は不要なはずですが、攻め入る敵はもういないからです。しかしこれはそれほど神の守りは確かであることの象徴なのでしょう。

またその城壁には 12 の門がありました。城壁の内側、都に入るための入口です。その 12 の門の上には、一つの門の上に一人ずつ、計 12 人の御使いがいたと記されています。黙示録の最初の方でアジアの 7 つの教会にそれぞれの教会を代表する御使いがついていたように、ここでもこれらの御使いは、この門を守る天使、門守天使とい

うことでしょうか。

またこれらの門にはイスラエルの子らの 12 部族の名前が記されていました。ここに再び旧約のイスラエルと新約の教会の連続性が示されています。今ヨハネが見ているのは、やがて完成に至った教会の姿です。しかしその教会は旧約のイスラエルと別ではない。旧約における神の民と新約における神の民は一つです。ですから神の民は旧約時代に用いられたイスラエルの 12 部族の名をもって代表することもできますのです。前に見た黙示録 7 章 4～8 節もそうでした。そこでは神の民全体がイスラエル 12 部族の名を用いて、各部族 12,000 人ずつの合計 144,000 人で表されていました。それは旧約と新約を貫く一つの神の民を表すものでした。

そして 13 節に 12 の門は東西南北に 3 つずつ配置されていたことが記されています。これはエゼキエル書の最終章 48 章の最後の部分をもとにしたものと考えられます。エゼキエル書では東西南北の門にそれぞれどんな部族名が記されたか、具体的に記されていますが、黙示録ではそこまでは書かれていません。ここではこの門が東西南北に 3 つずつ開かれていることを通して、あらゆる国の人々を迎え入れるものであることを象徴しているのでしょう。ルカの福音書 13 章 29 節：「人々が東からも西からも、また南からも北からも来て、神の国で食卓に着きます。」

そして最後 14 節に「都の城壁には十二の土台石があり、それには、子羊の十二使徒の、十二の名が刻まれていた」とあります。こちらは新約の 12 使徒です。改めて旧約と新約の一致という真理が示されています。ある人はなぜ使徒たちが土台石に名を記されて、イスラエル 12 部族は門に名を記されるのか。イスラエルの方が歴史的に先で、基礎であるなら、そちらが土台に記される方がふさわしいのではないのかと思うかもしれません。しかし使徒たちはここで「子羊の十二使徒」と言われていますように、キリストの使徒たちです。キリストを実際に自分たちの目で見たと目撃証人であり、またキリストを宣べ伝えるようにキリストご自身から任命された者たちです。それに対して旧約のイスラエルに与えられた約束は、このキリストを指し示すものであり、キリストにおいて成就しました。そういう意味で、ついに現れたキリストをはっきり指し示す使徒たちの名が土台石に記されることはふさわしいと言えます。これはイコール、キリストが土台であるということと同じです。エペソ人への手紙 2 章 20 節：「使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられていて、キリスト・イエスご自

身がその要の石です。」 このキリストの上にこそ教会は立っています。聖なる都・新しいエルサレムの基礎はただキリストであり、その方の子羊としての十字架のみわざに基づいて、旧約と新約を貫く神の民すべての祝福があるのです。

今日、私たちがこの箇所から心に留めたいのは、ヨハネが最初に見た花嫁なる教会、神の栄光に輝く都の姿です。この都全体は、この世のものではとても表現できない光を放っていました。最高の宝石に似て光り輝いていました。それはどんなに息を呑むような、また心奪われるような、素晴らしいものだったのでしょうか。この輝きの前では、この世のものすべてはちりあくたに思われたことでしょうか。いくらこの世の大淫婦が自分自身を派手に飾り、この世の豊かさを誇って見せても、それは一時的な輝きにしかならず、やがて滅ぼされるものでしかありません。私たちは果たしてそのようなやがては消え行き、なくなるもののために生きるべきでしょうか。そうではなく、今日の箇所に示されている、やがて神が導き入れてくださるまことの祝福、まことの栄光を見つめて、その日に向かって歩む者とさせられたいと思います。ヘブル人への手紙 11 章 16 節：「しかし実際には、彼らが憧れていたのは、もっと良い故郷、すなわち天の故郷でした。ですから神は、彼らの神と呼ばれることを恥となさいませんでした。神が彼らのために都を用意されたのです。」 同 26 節：「彼は、キリストのゆえに受ける辱めを、エジプトの宝にまさる大きな富と考えました。それは、与えられる報いから目を離さなかったからでした。」 私たちも霊の眼を開かれて、ヨハネが見た最高の宝石に似ている、神の栄光に輝く都を見つめ、そこから目を離さずに、ここにたどり着かせていただく歩みへ進む者でありたいと思います。

そしてそれはイコール神が与えてくださった救い主キリストに信頼し、この方を証しする生活に歩み続けることです。やがての聖なる都エルサレムを成り立たせている土台はキリストです。またこの子羊こそ私たち教会を最後の日まで養い育ててくださる救い主です。この方がご自身の十字架の犠牲を通して私たちの罪を赦し、聖め、最後の栄光の状態まで導いてくださいます。ですからこの子羊に感謝し、この方の御声にこそ聞き、この方を主とし続ける歩みへ進みたいと思います。そしてこの方によってやがてしみやしわのない、傷のないものとして御前に立たせていただいて、備えられた永遠の祝福に入る神の民、聖なる都エルサレム、花嫁なる教会の幸いな歩みへ導かれたいと思います。